修羅が嶮

喜劇時代ハンドボール

新弥太

しゅらがはしる

峰隆一郎

羅が変る

しゅらがはしる

峰隆一郎

青樹社

無検印承認

修羅が疾る　　定価1200円

著　者／峰　隆一郎

発行者／土井　勇

発行所／株式会社　青樹社

〒101 東京都千代田区三崎町2—6—7
電話　東京（03）264—6902・264—6904
振替　東京（1）47648

印刷所／有限会社八光印刷
製本所／土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

ISBN4—7913—0392—X

修羅(しゅら)が疾(はし)る——人斬り弥介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

一章　死屍るいるい　五
二章　人斬り志願　四〇
三章　殴り込み　八八
四章　人相書　一三
五章　成らぬ秘剣　一七三
六章　烏合の衆　二一三

装幀／鈴木邦治
題字／若月壽山

一章　死屍るいるい

神坂孫四郎は、掘り炬燵に足を入れて寝転んでいた。腰のあたりまで暖められて、うつらうつらと眠くなる。

深川八幡門前通り、ほんとは永代寺門前通りだが、深川八幡のほうが通りがよかった。この門前通り仲町に、深川で唯一つの酒問屋伊勢屋嘉右衛門の店がある。孫四郎が寝転んでいるのは、伊勢屋の離れ座敷である。

孫四郎は三十五歳、この離れに住むようになって五年になる。身分は浪人で、この伊勢屋の用心棒として雇われている。もっとも、この男は、二度ほど、この深川から姿を消したことがあるが、四、五カ月してもどってくると、同じようにこの伊勢屋の離れに住む。どこか得体の知れないところのある浪人だが、伊勢屋の者たちは、孫四郎のことは気にもしていない。

かれは、ふっと思いついたように体を起こした。そして莨盆を引き寄せ、煙管を咥え、きざみ莨を詰めて吸いつける。煙をくゆらしては、目を遠いものにする。淡い煙は、しばらく、かれの頭上によどんでいた。

白い障子に目をやった。外は明るい。まだ午前のようだ。床の間には土瓶に千両の一枝が挿されてあり、赤い小さな実を、十五、六個もつけている。

雁首を灰吹きにこんこんと叩きつけておいて、火を落とし莨をつめる。

享保六年（一七二一）も師走に入っていた。この年も暮れようとしている。暮れ近くになると、何かあわただしくなる。

もっとも、浪人の孫四郎には、あわただしくやる何もない。忙しい人の邪魔にならないようにし

ておればよい。かれには身内というものはない。だから、正月を迎える用意などというものもなかった。

孫四郎は、刀を手にして座敷を出ると、庭に降りた。草履をつっかけて、庭から裏木戸へ出る。路地を抜けて通りへ出る。門前通り、深川では最も人の往来の多い通りである。

深川は、塵埃と泥でできた街である。

むかしは永代島と呼ばれていた。この永代寺門前町は、承応年間に沼地を埋めたてられて作られたものである。

元禄十年（一六九七）に約十万坪の湿地に江戸市中の塵埃が集められ、埋められて木場ができた。正徳年間に千田新田ができ上がり、いまの享保には、原田新田が埋め立てられている。江戸の塵埃はみんな運ばれて土地となる。

埋め立てた土地は湿気を含んでいる。その湿気を抜くために縦横に掘り割りが掘られ、その堀に百五十に余る橋が架かった。つまり、深川は堀と橋の街でもあった。

木場に材木商人が集まり、店を開き移り住むようになり、この商人たちが落とす金で深川は潤い栄えた。金の動くところには博徒がはびこり、食いつめた浪人が蟻のようにたかる。

また、男たちが集まるところには、女が集まってくる。深川七場所と呼ばれる岡場所ができた。仲町、大小新地、表裏櫓、裾継、新古石場、向土橋、土橋の七カ所である。

もっとも、この享保に入ってからは、岡場所は廃され、女たちは地下に潜った。潜っただけで女たちがいなくなったわけではない。むしろ娼婦廃止令によって、女の価は上がり、それを縄張りにしている博徒たちの収益はよくなったくらいである。

岡場所を支配していたのは、深川に七つある博徒一家の貸元たちで、深川の七人衆と呼ばれてい

る。七人の親分衆はときおり集まって会合を持つ。だから縄張り争いも少なく、喧嘩も大きなものはなかった。

深川は下総国である。だから寛文元年（一六六一）に両国橋が架かるまでは、公儀の手も及ばず、町奉行の目も届かなかった。いまは両国橋の他に新大橋と永代橋が架かり、深川も江戸のうちになってはいるけれど、江戸市中のようには、公儀の手も目も届きかねていた。

永代寺門前町は、永代寺の北側を除く、東、西、南に広い地域にわたっている。寺領である。

西の黒江町から一ノ鳥居をくぐると、東へ向かってまっすぐに門前町通りが長く延びている。その突き当たり左手に富ヶ岡八幡宮があり、その参詣道でもあった。道の左右には水茶屋がひしめき合い、その間にもの売りの店も並んでいた。深川では最も大きな通りでもあり、いつも賑わっている道であった。

この日は、師走に入ったばかりで、空気は冷たいが、風はなく、寒さはそれほどではなかった。

伊勢屋の左手に一ノ鳥居、富ヶ岡八幡の入口には二ノ鳥居が立っている。

孫四郎は歩き出して、何気なく振りむき、足を止めた。

一ノ鳥居を三人の浪人が前後してくぐってくるところだった。浪人を見て、かれの眉根が曇った。三人とも、孫四郎の見知った顔だったのだ。

「玉虫三兄弟！」

ひとりごちた。

三人は、深川ははじめてのはずである。もの珍しげに左右の店を眺めながら、ぶらぶらと歩く。

この三兄弟が現われたからには、深川に何かが起こる。ただの遊山に来たわけではないだろう。何か目当てがあって来たはずだ。

浪人といっても尾羽打ち枯らしたみなりではない。木綿ではあるが、ましなものを着ているし、

腰には三人とも両刀を差している。
玉虫小兵衛が長兄で三十八歳にはなっている。次が小十郎、たしか孫四郎と同じ齢であった。末弟の小介は三十になったばかりだろう。三人とも背丈は五尺七寸ほど。体つきはたくましい。
先を歩くのは小十郎で着流しである。小兵衛と小介は袴をつけ、更に小兵衛は袖なし羽織を着ていた。
三人とも旅を続けて来たらしく、肌の色は黒い。黒い肌に双眸ばかりが炯っている。尋常な目の光ではない。
孫四郎の予感は当たることになる。ただ江戸見物に来て、深川まで足をのばしたというのではなかった。
もちろん、玉虫三兄弟も孫四郎は知っている。だがかれには気付かずに、三人は目の前を通りすぎた。
三兄弟は広い通りの中央を歩く。江戸の町中を歩くにも、さむらいは道の中央を歩き、その他の町人、職人は道の端を歩くものと決まっていた。もちろん武士に対しては道をゆずることになる。
かれは、八幡宮のあたりから、五人の男たちが道いっぱいに拡がって歩いてくるのを見た。この土地に巣食う博徒、鬼神台一家の者たちである。道を歩く人たちは、この五人に対しては道を避け、端に寄って通る。
深川には、博徒と浪人が多く、どこにも見られる。数は浪人のほうが多いが、博徒ほどにはまとまっていないので、力も弱く、浪人が博徒に道をゆずることになる。
深川には、七人衆と呼ばれる貸元がいて、それぞれ六、七十人の子分をかかえている。鬼神台一家はその一つである。貸元は五郎蔵という。
博徒が強いのは、七人の親分たちが、しっかり手を握っていて、それぞれの縄張りを確保しているからでもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三兄弟と、五人の博徒の間が次第に狭くなっていく。深川を知らない三兄弟は博徒に道をゆずることはない。とすれば衝突することになる。そこには血が流れる。

五人の男たちは三兄弟に道をゆずらせるつもりだ。三兄弟はそれに気付かないふりをして歩いている。五人の中央を歩くのは政吉という男で、孫四郎もよく知っていた。鬼神台一家では五指に入る男である。

先に足を止めたのは政吉だった。

「やいやい、どこ向いて歩いてやがる。浪人、そこをどきやがれ」

と政吉が声を張りあげた。道行く人たちが目を集める。三兄弟も足を止めた。

「町人は、道の端を歩くものだと決まっておる」

先を歩いていた小十郎が、低い声で言った。

「なんだと、てめえ、鬼神台一家を知らねえのか」

「知らんな」

「面白い、喧嘩を売ろうってのかい」

政吉がふところに手を入れる。匕首を呑んでいるのだ。

小十郎は、振り向いて小兵衛を見た。小兵衛が首を左右に振る。

「売りたい喧嘩なら、買ってやらんでもない。だが、ここは大道だ。関わりのない人に怪我させたくない。どこか人のいないところに案内せい」

「浪人、やろうってのかい」

五人の博徒も少し勝手が違った。これまでの浪人たちは、たいてい頭を下げて退いたものだ。

「いささか退屈しているところでな」

「あとで泣きべそかいても知らねえぞ」

と肩をそびやかす。

「兄貴、洲崎がいいぜ」

と政吉の後ろにいた男がいう。

「わかった。案内してやる、ついて来な、逃げるんじゃねえぞ」

男の一人が走った。一家の者たちを連れてくるつもりなのだろう。四人の男が背を向けて、いま来た道を歩き出す。三兄弟はそれについて歩き出した。孫四郎もまた、そのあとに続く。

孫四郎が、玉虫三兄弟と会ったのは、甲州街道の韮崎宿だった。二年前のことである。

宿場で本陣に次ぐ大きい旅亭『甲斐屋』の娘、お春という十五になる娘が、十人ほどの浪人に拐された。十人の浪人たちは、宿場はずれにある廃寺常念寺にこもり、甲斐屋に三百両の身代金を要求した。

そのとき、宿場屋の居酒屋で玉虫三兄弟はめしを食い、酒をのんでいた。孫四郎も同じ居酒屋にいた。

お春が拐されたことで、宿場は騒然となる。その噂は居酒屋の中にも入ってくる。

「神坂さん、どうだい、おれたちで、かどわかしの浪人を叩っ斬ろうじゃないか」

と言い出したのは、小十郎だった。孫四郎は、この三兄弟の腕を見てみたかった。それで応じることにし、四人揃って、甲斐屋に乗り込む。亭主の甲斐屋陣右衛門と交渉したのは小十郎だった。

「やつらに三百両渡しても、娘さんがもどってくる保障はない。わしら四人で百両、まかしてくれないか、娘さんは必ず助ける」

陣右衛門としても、金よりも娘の命、百両を惜しむわけはなかった。まず、三百両を用意させた。浪人たちへの見せ金である。

四人は常念寺へ向かう。三兄弟はまわり込んで斬り込む。孫四郎は三百両を持って正面から乗り込み浪人と交渉する役目を引き受けた。

石段を上がって、孫四郎が声をかける。数人の浪人が顔を見せる。

「三百両は持って来た。お春を渡してくれ」

と言ったときには、本堂の中で叫びが起こって

いた。十人の浪人が斬られたのは、あっという間だった。

孫四郎が、斬られる浪人を見たのは三人だけだった。小十郎が無造作に三人を斬るのを見た。片手で撫でるように斬っていた。

お春は無疵で助け出され、三百両と共に甲斐屋に届け、そのうちの百両を改めて甲斐屋から受け取る。孫四郎は、何もしないで四分の一の二十五両を貰った。

甲斐屋では、娘の命の恩人として、四人の浪人を宿に止め、十日間あまりももてなした。

これだけだったら、玉虫三兄弟の美談で終わる。だが孫四郎は、宿場の人たちの噂を耳にした。証(あかし)はないから噂だけだが、玉虫三兄弟が、十人の浪人を集め、お春をかどわかさせた、ということだった。

百両を甲斐屋から出させるための狂言、それも同じようなかどわかし事件が他所でもあって、その度に玉虫三兄弟の噂が流れたという。

三兄弟が集めた浪人ならば、乗り込んで油断させて斬るのも容易だろう。浪人の身ならば、食うためにこのような狂言を企むのも無理ないことだったのに違いない。

孫四郎が見たのは、小十郎の人斬りの技だけだったが、刀の使い方は巧みで、いかにも斬り馴れた動きだった。

目の前の三人の浪人は木偶(でく)のように斬られた。もっとも抜き合わせたとしても、小十郎に及ぶ者はなかったろう。

拍子斬りということがある。相手の動きに合わせて斬る。敵が刃に向かって重心を動かしたところに、うまく刃が入れば、二倍、三倍の力がそこに生じる。腰断も思いの他、容易にできる。腰断とは、人体を胴において上下に切り放すことをいう。

小兵衛と小介の腕は見ることはできなかった

が、小十郎に勝るとも劣らない技倆であるのだろう。

その玉虫三兄弟が、いま、目の前を歩いていく。いかに喧嘩馴れしていても、博徒が勝てる相手ではないのだ。

洲崎は木場の南側にある埋め立て地で、広い野原になっている。いまは夏草も枯れて、土色の景色が遠くまで拡がっているだけで、荒涼としていた。その南側は江戸湾の海になっている。

四人の博徒の前に立ったのは、小十郎一人だった。小兵衛と小介は少し放れたところに立ち、見物人の立場である。

孫四郎は、この洲崎が埋め立てられたときに建てられたと思える朽ちて崩れそうになった道具小舎に隠れるように立っていた。

まず先に政吉が、ふところの匕首を抜いた。刃が陽をはねて光る。刃渡り九寸五分、その匕首を腰だめにして政吉が小十郎に向かって走る。刀を抜く余裕も与えず、体ごとぶっつかっていった。

小十郎の体がわずかに動いたとみるや、政吉の体が跳び上がって地面に叩きつけるように落ちた。

「やろう！」

と叫んで跳び起きようとした政吉は膝を抱いて転がった。向こう脛を蹴られたようだ。その政吉の頤のあたりを、小十郎の足が蹴り上げる。頭ががくんと揺れ、ひっくり返って動かなくなった。気絶したようだ。

残った三人は、それぞれに匕首を抜いていた。三人がわめきながら突っかけようとしたとき、北側に黒い塊が湧いた。十数人の鬼神台一家の者たちである。

三人が、そちらに気を奪われた瞬間、小十郎は動いていた。動きながら刀を抜き、刀刃を三度閃めかせた。

一人は両眼を潰され、一人は首筋を斬られ、三

人目は匕首を摑んだ右手首を斬り落とされていた。小十郎の動きには全く無駄がなく、測ったように正確に斬っていた。

そして、次の瞬間には、十数人の博徒に向かって走っていたのである。

両眼を潰された男は、匕首を投げだし、両手で顔を掩(おお)ってうずくまり、首の血管(ちくだ)を裂かれた男は、血を噴出させながら、よろめき歩き、手首を失った男は、うつろな目つきで、失った手首を見ていた。

小十郎は十数人に向かって走りながら、裾をからげて帯に挟む。

小介が、手首を失った男に歩み寄る。

「どうだ、血止めをしてやろうか」

「ちくしょう、てめえ」

男が小介を睨みつけ、匕首を左手で拾おうとする。

「人の親切が気に入らないようだな」

足もとに落ちた手首を拾う。それを男の胸に叩きつけた。握っていた匕首が胸に突き刺さる。わっ、と叫んでよろめく。たたらを踏むように、二、三歩歩いてぶっ仆れた。手足をひくひくと痙攣させる。

人を殺すのに痛痒を感じない顔である。

小介は、いま一本の匕首を拾うと、顔を掩って転げまわっている男の胸に突き刺した。男の体が弾ねた。

「両目を失っては、生きているのもつらかろう」

斬った相手のとどめを刺してやるのが武士の作法でもある。それが功徳でもあるようだ。あまり苦しまれては恨みを残す、一思いに死なせてやったほうが成仏できる。

小十郎は、十数人の黒い塊の中に斬り込んだ。それを小兵衛と小介は、手をかざして眺めている。もちろん、小十郎一人で充分に間に合うのだ。

男たちの間に喚きと叫びが起こる。刃が煌いて

いる。一人、二人と地に伏しているのも見えていた。

一つの影が黒い塊の中から走り出る。小十郎だ。それを博徒たちが追う。足を止めて追ってくる男を斬り、そしてまた走る。大勢を相手にしたときにはどう戦えばいいかを知っている。

博徒たちは手に手に長脇差を振りかざしていた。いつもは匕首で喧嘩のときだけ、長脇差を持ち出す連中である。

走る博徒の影が五つになった。すると、逆転して、小十郎が追いはじめる。一人を斬り、そして次の者を追う。

「悪い癖だ、逃げるのは放っておけばよいのに」

小介が言う。

「癖というやつは治らん」

小兵衛が笑いながら言う。

逃げる男は一人になった。小十郎はそれを執拗に追っている。男は足をとられてひっくり返り、弾ね起きて逃げる。小十郎は鬼ごっこの鬼になっていた。

孫四郎は、小舎から放れて小兵衛と小介に歩み寄る。二人が振り向いて見て、

「一別以来ですな」

「おお、神坂さんか、珍しいところで会うものだ」

「神坂さんは、この深川にお住まいですか」

小兵衛に続いて、小介が言う。かれが玉虫三兄弟と共に旅亭で過ごしたのは四、五日だった。

「ずっと、深川に住んでいますよ。あなた方は」

「いや、わしらも、しばらく落ちつきたいと思うて江戸にやって来た。旅も少し飽きたものでな」

「この深川に？」

「左様、わしら浪人には深川が住みやすいと聞いたのでな」

「わしに、何かお手伝いすることがありますかな」

「かたじけないが、わしら三人で何とかやってみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.